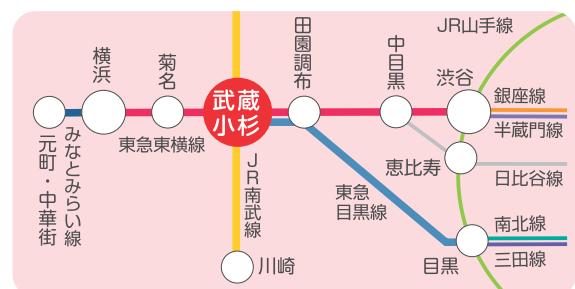


認知症街ぐみ支援ネットワーク

Access Map



●お気軽にご相談ください…。

**044-733-2007**



〒211-8533  
神奈川県川崎市中原区小杉町1-396  
日本医科大学老人病研究所

認知症街ぐみ支援ネットワーク  
文部科学省 私立大学学術研究高度化推進事業  
社会連携研究推進事業（平成19年度～平成23年度）  
[総括責任者]  
日本医科大学 老人病研究所 所長 川並 汪一

# 街ぐるみ 認知症相談センター



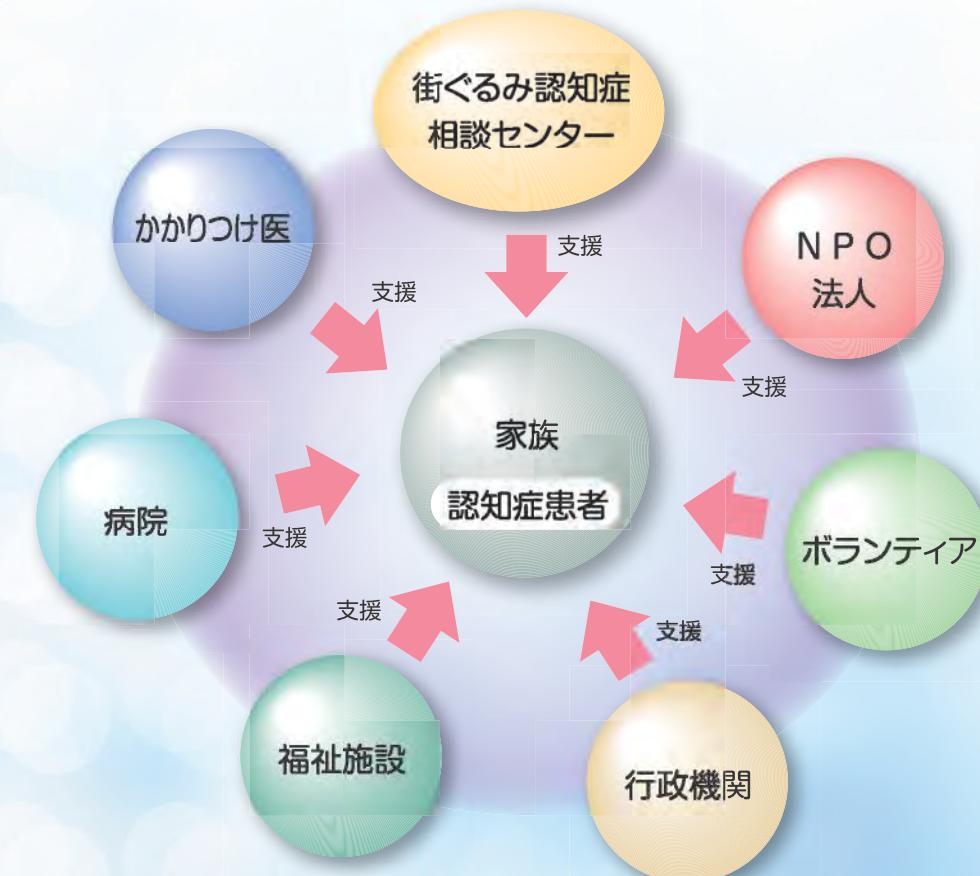
# 安心して暮らせる思いやりあふれる やさしい都市へ…。

日本医科大学老人病研究所は文部科学省の補助を受けて、“認知症街ぐるみ支援ネットワーク”事業を立ち上げました。わたしどもの先端的基礎医学研究の成果を基盤として、認知症専門医グループと連携し認知症の早期発見に努めます。さらに発症予防および将来の治療法確立のために貢献したいと考えています。その目的を達成する事業拠点として“街ぐるみ認知症相談センター”を開設しました。ご本人やご家族、介護士、看護師、地域住民、福祉施設、病院、企業、NPO法人、ボランティア、行政などと緊密な連携をとりあいます。そして認知症になっても、“住み慣れた町でその人らしく暮らせる、「健康都市かわさき」”をつくることを目指します。



日本医科大学大学院  
加齢科学系教授  
老人病研究所 所長  
川並 汪一

街ぐるみ認知症相談センターの目的と役割



認知症街ぐるみ支援ネットワーク

## Q & A 街の人の**疑問**点にお答えします。

**Q1**

街ぐるみ認知症相談センター  
って何なの？

**A**

文科省からの助成事業の一つである社会連携研究推進事業として採択された日本医科大学老人病研究所の"認知症街ぐるみ支援ネットワーク"を実践する拠点です。

**Q2**

街ぐるみ認知症相談センター  
ってどこにあるの？



**A**

渋谷から東横線で12分、武蔵小杉駅北口から歩いて5分、タワープレイス裏手で日本医科大学武蔵小杉キャンパス南端の駅側にあります。

**Q3**

どんな人が街ぐるみ認知症  
相談センターを利用できるの？



**A**

最近もの忘れが気になり、悩みや不安な気持ちを抱えている本人やご家族の方など、どなたでも利用できます。また、かかりつけ医・ケアスタッフ・ボランティアグループなどの紹介も受け付けます。

**Q4**

街ぐるみ認知症相談センターでは  
誰が相談に応じてくれるの？

**A**

個人情報の保護と倫理規定を遵守する立場から、一定の研修を受けたカウンセラー、臨床心理士、ボランティアがお話を承り、看護師、特定分野の専門家、医師なども応対します。

**Q5**

具体的にどのように認知症の相談にのってくれるの？



**A** まず、ご本人と付き添いの方からしっかりとお話をうかがいます。必要に応じて、もの忘れチェックなどの簡単な検査をします。そして加齢によるもの忘れか、認知症を疑うもの忘れかを判断します。

**Q6**

お医者さんと同じことをするの？



**A** いいえ、街ぐるみ認知症相談センターは医療機関ではないので医療行為はしません。ですから注射などもありません。必要に応じて、簡単な身体検査（体重、血圧など）や体力測定が加わります、相談や検査もすべて無料です。

**Q7**

街のお医者さん（かかりつけ医）との関係はどうなるのかしら？



**A** 認知症患者さんの主治医は、お住まい近くのかかりつけのお医者さんであるべきと考えます。主治医のお医者さんと密接に相談しながら、このセンターはいろいろな課題を模索解決するのです。

**Q8**

街ぐるみ認知症相談センターにきた人で認知症が疑われたらどうなるの？

**A** センターはまず、かかりつけのお医者さんに連絡していろいろ相談します。また、かかりつけのお医者さんがいない人には、ご近所のお医者さんをご紹介するようにします。

**Q9**

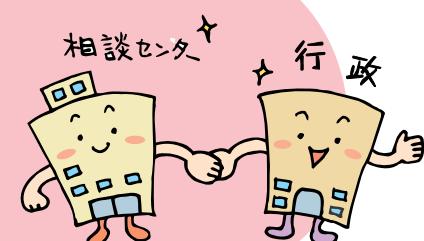
認知症街ぐるみ支援ネットワークでは、相談したご本人と、どこの何を結びつけるのですか？

**A**

ご要望に応じ認知症の専門医、介護施設、地域包括支援センター、ボランティアグループなどのほか、最新の情報を紹介します。その後もご本人とは定期的にお会いし相互に連携をとりながら支援にあたります。

**Q10**

川崎市や中原区などの行政とはどのような関係を持つのですか？

**A**

"認知症サポート医"や"地域包括支援センター"の活動は厚労省、川崎市、中原区が期待しています。街ぐるみ認知症相談センターは行政と協力して、"健康都市かわさき"の基盤を作るお手伝いをしたいのです。

**Q11**

社会連携と言いながら、実際には日本医科大学の武蔵小杉病院を偏重することにならないのですか？

**A**

文科省はこの事業で、社会連携による学術研究の高度化を目指します。この事業の中心は日本医科大学老人病研究所です。そして他の機関と連携する義務があり武蔵小杉病院を偏重してはいけないです。

**Q12**

どうして特定の企業や法人が参画しているのですか？

**A**

この事業は企業や法人の参画を求めています。認知症研究で世界をリードする企業や病院の協力を得て一層の成果が期待できます。川崎市経済局のご協力で他の企業の参加も予定しています。



## Q13

認知症街ぐるみ支援ネットワーク  
事業の計画を簡単に教えて  
もらえますか？



**A** 平成19年度：街ぐるみ認知症相談センター設立、  
啓発公開講座、地域における認知症  
の実態調査  
平成20年度：早期発見の試み、啓発活動の強化、  
基礎・臨床医学国際フォーラム開催  
平成21年度：発症予防のための健康科学（栄養学、  
スポーツ科学、代替医療）の推進

## Q14

その後の計画もあるのですか？

**A** 平成22年度：当初3年のまとめに基づく軌道修正と  
健康科学に基づく予防策の強化  
平成23年度：ネットワーク事業に関わる本人、家族、  
介護者それぞれのQOL判定と総合評価  
次の5カ年計画の策定とコホート研究の基盤確立

## Q15

認知症街ぐるみ支援ネットワーク事  
業の最終目標は何なの？

**A** 地域の皆さんとともに、認知症の早期診断、発症予防、  
治療ないし対処法を医療機関と連携しながら具体化  
します。そして広義の"健康都市かわさき"の街づくり  
を目指し、その成果を広く社会に還元します。



# 私立大学学術研究高度化推進・社会連携研究推進事業

街ぐるみ認知症相談センター

## “認知症街ぐるみ支援ネットワーク”のメンバー

●総括責任者 老人病研究所所長 川並 汪一（日本医科大学教授）

●臨床側責任者 武藏小杉病院神経内科 北村 伸（日本医科大学准教授）

### ●顧問

日本医科大学学長 荒木 勤

日本医科大学大学院研究科長 寺本 明

日本医科大学医学部長 田尻 孝

### ●日本医科大学基礎医学グループ

老人病研究所部門長（大学院加齢科学系）

病理部門教授 川並 汪一

生化学部門教授 太田 成男

疫学部門教授 南 史朗

免疫学部門教授 田中 信之

分子生物学部門教授（代行） 岡 敦子

生体応答学部門准教授（部門兼務） 北村 伸

医学部生理学（システム生理学）教授 佐久間 康夫（研究委員会委員長）

医学部医療管理学教授 長谷川 敏彦（健康日本21企画メンバー）

### ●日本医科大学基礎科学グループ

新丸子基礎科学主任・生物学教授 岡 敦子

心理学准教授 杉浦 京子

スポーツ科学准教授 武藤 三千代

英語学准教授 ティモシイ ミントン

### ●日本医科大学臨床医学グループ

武藏小杉病院院長・救命救急医学教授 黒川 顕

内科学（神経・腎臓・膠原病・リウマチ部門）教授 片山 泰朗

精神医学教授 大久保 善朗

内科学（内分泌代謝部門）教授 及川 真一

### ●日本医科大学情報科学センター施設長 伊藤 高司

### ●社会連携研究グループ（順不同）

東京都老人総合研究所 本間 昭（日本認知症ケア学会理事長）

日本医科大学同窓会 馬越 正通（会長）

社団法人老人病研究会 宗像 一雄（常務理事）

エーザイ株式会社 中西 憲幸（医薬部長）

株式会社脳機能研究所 武者 利光（代表取締役・東京工大名誉教授）

株式会社日本スウェーデン福祉研究所 グスタフ・ストランデル（取締役）

初石病院 森 修（副院長）

川崎市内科医会 三川 武彦（会長）

川崎市老人福祉施設事業協会 河村 良一（常務理事・事務局長）

川崎市認知症ネットワーク 柿沼 矩子（代表）

中原区医師会 島利夫（前会長）

中原区社会福祉協議 田中 洋一（会長）

中原区町内会連絡協議会 原 良三（会長）

中原区民生委員児童委員協議会 吉房 正三（会長）

中原区社会福祉協議会 三竹 和子（会長）

NPO法人小杉エリア・マネジメント 杉野 茂彦（副会長）

中原区老人クラブ連合会 富岡 茂太郎（副会長）

中原区小杉町一丁目町会 吉房 正三（代表）

中原区老人クラブ連合会 熊澤 清之助（会長）

中原区小杉町一丁目町会 石橋 榮次（会長）

### ●行政協力

川崎市

# 日本医科大学老人病研究所と社団法人老人病研究会の歩み

街ぐるみ認知症相談センター

年 度	老人 病 研 究 所	(社) 老 人 病 研 究 会	そ の 他
1954年（昭和29年）	創設所長 緒方知三郎ビタミン/パロチンの普及 産学・社会連携事業を実践	創設会長 緒方知三郎 厚生省管轄の社団法人として認可	
1956年（昭和31年）			第1回日本ジェロントジー学会開催 会長：塙田広重（日本医科大学学長）、 部会長：緒方知三郎（老年医学会）
1959年（昭和34年）			第1回日本老年医学会総会開催 日本老年学会の分科会として 日本老年医学会・日本老年社会学会が発足
1968年（昭和43年）	所長退任 緒方知三郎 老人病研究所（老研）は学校法人日本医科大学に移管	会長継続 緒方知三郎 (社)老人病研究会は老研から分離するも 事務部門は老研事務室に設置	“(社)老人病研究会のその後の業績” 早川町総合健診事業を実施しC型肝炎の 疫学調査と解析（平成18年まで継続し終了）
1971年（昭和46年）			石川正臣 日本医科大学学長（～'73）
1972年（昭和47年）			*東京都老人総合研究所・老人医療センターの設置
1974年（昭和49年）	所長 石川正臣		
1980年（昭和55年）		会長 石川正臣	
1982年（昭和57年）	所長 金子 仁		*愛知医科大学加齢医科学研究所設置
1983年（昭和58年）			
1987年（昭和62年）	所長 菊地吾郎 (東北大名誉教授)	会長 丸山正	
1989年（平成元年）			菊地吾郎 日本医科大学学長（～'92） 医学部・大学院教育の抜本的改革
1990年（平成2年）	所長 中島信治 武蔵小杉キャンパス移転	武蔵小杉キャンパス移転	
1992年（平成4年）		会長 永井 泰	
1993年（平成5年）			*東北大学 加齢医学研究所設置
1994年（平成6年）	所長 大国壽士 老人病研究所紀要発刊		
1995年（平成7年）			*社団法人日本老年医学会が設立 *国立長寿医療研究センターの設置
1996年（平成8年）		会長 大森暢久	
1998年（平成10年）	所長 川並汪一 文科省 学術フロンティア事業 採択		
2002年（平成14年）	所長 太田成男	街ぐるみの“ご長寿ネット”を開設	
2003年（平成15年）		会長 高橋修和	*信州大学医学部附属「加齢適応研究センター」の設置
2004年（平成16年）	老人病研究所創立50周年	50周年 記念式典・シンポジウム	
2006年（平成18年）	所長 川並汪一	会長 川並汪一	
2007年（平成19年）	文科省 社会連携研究推進事業 採択		

●2007年までに老年医学を冠した医学部の部門が全国に合計24部門開設 14

# 老人病研究所の最近の事業活動実績

(1) 日本医科大学大学院加齢科学系の創設

(2) 科学研究費補助金、助成金の受け入れ

文部科学省

学術フロンティア推進事業

未来開拓研究推進事業

バイオベンチャー研究開発拠点事業

ゲノムサイエンス研究

産学連携研究推進事業

総合がん総括研究

学術研究高度化推進事業・社会連携研究推進事業

“認知症の街ぐるみ支援ネットワーク”(2007年～2011年の5ヵ年計画)

科学研究補助金(特定領域研究、基盤研究、その他)

厚生労働省

厚生科学研究費

特定疾患研究事業

長寿科学総合研究事業

精神・神経疾患研究委託事業

萌芽的先端医療技術推進研究事業

ヒトゲノム・再生医療等研究事業

経済産業省

大学発事業創出実用化研究開発事業

その他 各種財団、企業、学会などからの研究費は除く

(3) 日本医科大学初のベンチャー企業創設

加齢とミトコンドリア、抗酸化水素機能の応用

(4) “ご長寿ネット”の創設

武蔵小杉病院、(社)老人病研究会、小杉町会と共に  
(<http://www.nms.ac.jp/gochojunet/>)

## “私の履歴書”

老人病研究所と社団法人老人病研究会の創設者 緒方 知三郎

明治16(1883)年1月31日 蘭学者緒方洪庵の息子惟準(コレヨシ)の嫡男として誕生。

名前“知三郎”は“天知る-地知る-我知る”に由来する。

幼少のわんぱく時代、大坂の“通塾”にて福沢諭吉らと交流を持った。

東京大学医学部を卒業、ドイツ留学から帰国し病理学教室教授に就任。

昭和18年東京大学教授定年の年に東京医専の理事長に就任。

昭和21年東京医科大学に昇格させ初代学長となった。唾液腺ホルモン・パロチンが成長と重要臓器の機能保持に不可欠であること、性ホルモンの分泌と交替し分泌が低下することを見出した。

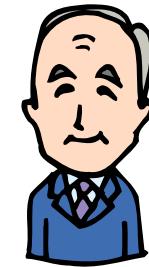
昭和27年東京医大学長を退任。

昭和29年抗加齢の重要性を啓発するために(社)老人病研究会と老人病研究所を設立した。

昭和32年文化勲章を授与された。

昭和43年老人病研究所を日本医科大学に移管し、(社)老人病研究会と分離した。67歳白内障、70歳前立腺癌、75歳腸閉塞、76歳胆のう炎そして81歳肺炎などの老人病に悩まされた。その間、俳句日記(大学ノート45冊)を残した。

昭和48年(1973年)逝去。



### 〈老化に関する緒方理論〉

昭和18年までの研究の成果を踏まえ、唾液腺欠乏による症状をニセの老化と考え、真の老化は長年にわたる消耗の結果であるとの仮説を提唱した。

したがって老人病はニセの老化を前駆症状としておこる病気であり、ニセの老化を追放すれば真の老化に至るまで天寿を全うできると推定した。

### 〈趣味〉

昭和8年に奇術東京アマチュア・マジシャンズ・クラブ設立。

東京大学に在籍中は学生陸上運動部の部長にて活躍。

学生時代に長唄を習ったが、その師匠吉住慈恭と同時に文化勲章授賞。

### 〈緒方知三郎の独り言〉

私は病理学者ということになっているが大学教授という仕事はどうも好きでない。講義の準備などしたことは無い。答案は読まずに全員80点をつけた。

しかし研究者としての仕事には大いに生きがいを感じた。仮説を立てて探しを入れて実証するがその探し方が一種の賭けでありそのカンがあつれば研究の醍醐味を十分に知ることが出来る。

最初の家に書斎を持ったがさっぱり使わなかった。その後書斎と言うものを全く持たず、ひ孫が走り回り、テレビが鳴る茶の間で、もっぱら“ながら勉強”である。

88歳の“無書斎人”は、きょうもちゃぶ台に向かって本を読み、ペンをとっている。

(昭和45年 日本経済新聞より抜粋)

## Memo

発 行 日本医科大学  
監 修 日本医科大学 大学院加齢科学系教授 老人病研究所所長 川並 汪一  
発 行 日 2007年10月27日

制 作 株式会社 サンプラネット  
デザイン IPT竹村勝巳 土田和寛  
イラスト モンマヒロミ  
印 刷 鶴川印刷株式会社

### ●シンボルマークのデザインコンセプトについて ▶▶▶ [ ]

認知症街ぐるみ支援ネットワーク事業拠点の街ぐるみ認知症相談センターの目的である、認知症の早期発見・発症予防・治療の3要素を「街ぐるみ」という「3つの胡桃」にたとえたカタチで、医療的目的を達成する“かたい意志”を、その“胡桃のかたさ”に込めており、地域の市民に親しまれ、やさしさの根付いてゆく様子をシンボライズしています。  
そしてイメージカラーは、日本医科大学老人病研究所の先端医学研究がリードし育んでゆく新緑のライトグリーンと、支援・協力する力・愛情をやさしい爽やかなピンクで表現し、健康と明るい未来の都市を示すイエローを採用しています。

本書の内容等を無断で、複写、複製することは禁じられています。

(30,000)